報徳の教え・・・四つの柱

報徳の教え（思想）の四つの柱は、
「至誠」「勤労」「分度」「推譲」という言葉であらわされています。

至誠

尊徳は「人間も動植物も全ての物や事には、美点、長所、よさ、取柄があり、それらを「徳」として、真心をもって接し、お互いに引き出し合うことが最も大切なこと」と教えています。特に人間関係や仕事関係においては、誠心誠意心を込めて対応することが、最終的には自分をも生かすことにつながり、自他共に、精神的な豊かさをもたらすことになります。

勤労

勤労とは、何事にも生懸命、心をこめて努めることです。尊徳は、単に収入を得るため、出世のため、食べるために働くのではなく、天地人の徳に感謝しながら働くことが大切だと説きました。全てのものにある徳を見つけ、感謝し、自己を高めるために働くのです。勤労には知恵と力が必要で、常に工夫し、前向きに、積小為大の気持ちを持って働くことが大切です。

分度

分度とは、尊徳の独創とも言える考え方で、自己の力量と物事の関係性をよくわきまえて行動することです。自分と自然との関係、社会との関係、歴史との関係、両親や地域との関係について、その貸借をよくわきまえた上で、自分の暮らし方や信条・収支を決めていくことです。世の中は関係性が大切で、適度、丁度、節度、程度、限度等の客観的尺度をわきまえて、自分を悟ることです。

推譲

分度の計算を正しくすれば、多くの人は、自然、歴史、社会、両親から、もらったものの方が、あげたものより多いことが分かる筈です。そこで、蓄えたお金や力を、世のため人のために貢献することに使うことを推譲と言います。尊徳は、農村の再建にあたり、殿様や武士が増産分を農民に譲り、農民は貯蓄と将来の土地改良費や後継者に推譲をすることをすすめ成功しました。

大日本報徳社の主要建造物

仰徳（ごうとく）記念館

明治17(1884)年、東京霞ヶ関に有栖川宮邸として建てられた日本館の一部が、昭和13(1938)年、当時の一木喜徳郎社長の尽力によって、宮内庁から下賜、移築されました。現存する宮家の数少ない貴重な建造物です。(静岡県指定文化財)

仰徳（ごうとく）学寮

仰徳記念館とともに、昭和13(1938)年に移築された有栖川宮邸の一部。大講堂の北寄りに位置し、東西に棟を向けて建つ木造総二階建て寄棟造りの建物です。
(静岡県指定文化財)

淡山翁記念報徳図書館

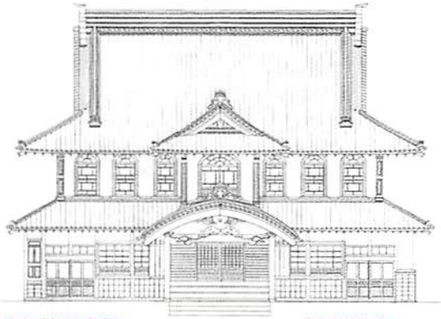
大日本報徳社第二代社長であった岡田良一郎(淡山)の多大な遺徳を記念し、昭和2年に建てられた鉄筋コンクリート造りRC工法の図書館。建築学的にみても、往時の図書館様式を今に伝える貴重な建造物です。
(静岡県指定文化財)

大日本報徳社正門

道徳門・経済門と刻まれている正門左右の門柱は明治42(1909)年の建立。これは道徳と経済の調和した社会づくりをめざす、報徳の教えを象徴しています。奥に見えるのは大講堂です。
(静岡県指定文化財)

大講堂大広間

大講堂(旧遠江国報徳社公会堂)は、掛川城の北東に、二宮尊徳の教えを体系化した報徳思想を普及・啓蒙する中心拠点として、明治36(1903)年に建設された。
(国指定重要文化財)



冀北学舎

明治10年～17年、岡田良一郎が掛川市倉真の自邸に開いていた冀北学舎は、その使命に幕を閉じた後、明治32(1899)年にこの地に移築され、報徳が建学精神の私塾の姿を今に伝える明治期の貴重な建造物として保存されています。
(静岡県指定文化財)

公益社団法人

大日本報徳社

報徳思想と大日本報徳社の歴史

二宮尊徳

報徳運動は、明治維新前後の日本の近代化黎明期に、二宮尊徳の唱えた報徳思想の普及をめざし、道徳と経済の調和を説き、困窮する農民の救済をはかり、全国に広まりました。尊徳高弟の岡田良一郎の指導活動が盛んだった掛川は、やがて全国の報徳運動の中心となり、「大日本報徳社」が開設されました。

二宮尊徳は幼名を金治郎といい、少年時に両親と死別。以後、貧しい暮らしの中で勤労に励み、独学で豊かな見識を育み、全国各地の困窮した六〇〇余の農村の救済に手腕を発揮しました。

その行動から培った知恵を、二宮尊徳が体系化して唱えたものが「報徳の思想」です。それは、様々な生活様式（仕法）として人々の暮らしに定着していき、その教えを百八文字にまとめたものが「報徳訓」です。

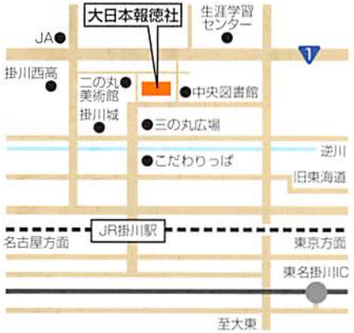
人間の欲を認めながらも、周りとたくみに調和させ、心もお金も同時に豊かに育もうという倫理思想は、農村救済の枠を越えて幅広い分野に浸透しました。渋沢栄一、安田善次郎、豊田佐吉、松下幸之助、土光敏夫をはじめとする、多くの経済人たちにも多大な影響を与えるなど、今も脈々と息づいています。

尚２００３年からは、北京大学等から都市農村の格差是正思想として尊徳思想が評価され、国際二宮尊徳思想学会が隔年に開かれています。

報徳訓

父母根元在天地令命
身體根元在父母生育
子孫相續在夫婦丹精
父母富貴在祖先勤功
吾身富貴在父母積善
子孫富貴在自己勤労
身命長養在衣食住三
衣食住三在田畠山林
田畠山林在人民勤耕
今年衣食在昨年産業
來年衣食在今年艱難
年年歳歳不可忘報徳

二宮尊徳先生撰文



公益社団法人 **大日本報徳社**

〒436-0079 静岡県掛川市掛川1176番地
TEL0537-22-3016・FAX0537-23-5523
HPアドレス http://www4.tokai.or.jp/dainihonhoutoku/
E-mail dainihonhoutoku@cy.tnc.ne.jp

掛川に根づいた報徳運動の歴史

第２代社長 岡田良一郎
（静岡県指定文化財（黒田清輝作））

大日本報徳社初代社長 岡田佐平治

報徳運動は、江戸時代末期から、各地の困窮の村々を救い、農民生活の安定化に貢献した実学的な手法として全国に浸透しました。特に静岡県には、明治三十年代、四百二十社におよぶ「報徳社」が結成され、とりわけ、その活動が盛んだったのは、掛川を中心とした遠州地方でした。

二宮尊徳から直接に教えを受けた岡田佐平治、良一郎親子が中心となって繰り広げられた掛川藩内の農村復興の努力は、やがて明治８（１８７５）年の遠江国報徳社創設に結実しました。また、岡田良一郎は資産金貸付所を明治７（１８７４）年に創設し、それが掛川信用金庫となりました。また、産業に関する協同組合的思想は産業組合となり農業協同組合の原点となっています。一方、明治10（１８７７）年岡田良一郎が開いた私塾、冀北学舎は、明治17年まで続き、県内外の１５２人の逸材を輩出しました。岡田良一郎の息子である岡田良平、一木喜徳郎も、冀北学舎で学び、後に文部大臣や宮内大臣を務めました。

大日本報徳社の事業は、岡田家四代で終戦を迎え挫折しかかりましたが、ＧＨＱのインボーデン新聞課長の好評価などでよみがえり、戦後の復興を担いました。そして、第五代社長河井彌八（元参議院議長）、第六代社長戸塚九一郎（元労働・建設大臣）と続き、第七代社長神谷慶治（元東京大学農学部長）を経て、第八代社長榛村純一（元掛川市長）に引き継がれています。現在の榛村社長（平成13年～）の時代に、大講堂等の六つの近代和風木造建築物群の保存修復工事が完成し、公益社団法人（平成24年7月）に移行しています。

第３代社長
岡田良平

第４代社長
一木喜徳郎